

保育者を目指す学生の教職意識 —小学校教員を目指す学生との比較を通して—

田中 敏明*¹・二子石 諒太*²・永淵 美香子*³

*¹九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

*²福岡教育大学附属幼稚園 宗像市赤間文教町1-1 (〒811-4192)

*³中村学園大学短期大学部 福岡市城南区別府5-7-1 (〒814-0104)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

要 旨

幼稚園教諭や保育士を目指す学生の、就職後の勤続予定期間、保育者の社会的地位、高校までの好きな教科、苦手な教科、大学・短大で学ぶ教科の中で保育者となるために大切だと思う教科、好きな教科、苦手な教科、子どもにとくに育てたいと思うもの、子どもの問題行動に対する意識、新しい教育施策に対する意識を調査し、小学校教員を目指す学生と比較することによって、教職意識の特徴を明らかにした。その結果、小学校を志望する学生に比べて、予定する勤続期間が短い、保育者の社会的地位が低いと感じている、実技教科を得意とし、数学、理科、社会を苦手とするなどの特徴が明らかになった。これらの特徴から、保育者養成校における養成上の課題や幼稚園、保育所で実施する保育研修の課題について、改善すべき点を中心に考察した。

キーワード：保育者を志望する学生 教職意識 保育者養成 保育研修

研究の背景と目的

就学前の子どものほとんどが幼稚園または保育所に就園する現在、幼稚園教員や保育所保育士は、子どもたちにとって最初に出会う「先生」であり、人生の基本的な部分を形成する重要な存在である。保護者の「先生」に対するイメージも保育者によって決定されるといっても過言ではない。幼稚園や保育所の役割は子どもの保育に留まらず、保護者支援、家庭支援、地域支援まで広がっており、保育者の役割と責任はますます大きくなってきている。保育所保育指針解説書(2008)には、保育者に求められる専門性として、①子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見

守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術の6項目が挙げられている。ここで求められる資質は、幼稚園教員にもそのまま当てはまる。

さらに、幼稚園教育要領や保育所保育指針には、小学校学習指導要領とは異なり、年齢に伴う発達過程が示されておらず、発達過程を保育者自らが把握し、子どもの実態に基づいて長期および短期のねらいを設定し、教育課程と指導計画を作成して保育にあたらなければならない。

ねらいや内容は、幼児の心情、意欲、態度を育てることが中心であり、これらの点から考えても、小学校教員よりもより高い資質が求められるのではないだろうか。

室と宮崎(1998)は、保育学生を対象に1977年と1997年に保育学生を対象にした意識調査を行い、一生の仕事としたい学生が増加したこと、幼稚園就職希望者が保育所就職希望者をやや上回るものの、両者の間にあまり差がなくなったこと、重要で、社会的仕事と認められていると回答する学生の割合が大きく増加したことなどの傾向を認めている。山口(1986)は、森らの行った調査のちょうど中間年に調査を実施し、保育所に就職を希望する学生が全体の半数以上を占め、幼稚園希望者の3倍近くに達していること、保育者になるために役に立つ科目として、保育実習や保育内容などの実技系科目を挙げる学生が多く、保育・教育系科目を挙げる学生は少ないなどの結果を見出している。これらの調査から20年から30年が経過した現在、保育学生の意識はどのように変化しているのだろうか。

最近、保育者の資質の低下が指摘されている(日本保育士協会、2014)。これらの原因として、保育者不足に伴う保育職就職率の向上(希望すれば誰でも保育者になれる)と採用試験の簡易化(面接、作文、ピアノ実技のみが多い)、ゆとり教育による学力の低下、低賃金による保育職の魅力の低下などの要因を指摘することができる。保育者の質を向上させるためには、低賃金や長時間労働の改善など根本的な対策が必要であることは言うまでもない。

その一方で、保育者養成校における養成の在り方や保育研修の見直しが求められる。養成校では、採用試験や保育現場からの要請もあって、ピアノ、歌、絵画・造形、身体表現などの実技系の教科が重視されがちである。保育現場の保育研修も実技系の研修に偏る傾向がある。しかしながら、保育者の資質は、実技力だけで決まるものではない。保育という仕事に対する情熱と意欲、暖かき、積極性、根気強さ、困難を乗り越える心の強さ、責任感などの性格的な要因、子ども理解、保育を理解し創造する力、様々な事象に対する興味・好奇心、子どもに伝える豊富な知識などが総合された資質や能力、すなわち教職意識と教職力が保育者の資質を決定づける。保育者養成校や保育現場では、学生や保育者の教職意識、教職力の実態を把握し、実態に即した保育者養成や保育研修の在り方について再度検討する必要がある。保育者を目指す学生の意識については、これまでもいくつかの調査研究が行われている。しかしながら、いずれの調査も保育者を目指す学生のみを対称にしたものであり、その結果

が保育者を目指す学生独自の特性なのか、最近の学生の一般的な特性なのか不明である。本研究は、養成校間格差を少なくするため、4年制大学と短期大学を含めた4校の保育者をを目指す学生と小学校教員を目指す学生の、就職後の勤続予定期間、保育者の社会的地位、高校までの好きな教科、苦手な教科、大学・短大で学ぶ教科の中で保育者となるために大切だと思う教科、好きな教科、苦手な教科、子どもにとくに育てたいと思うもの、子どもの問題行動に対する意識、新しい教育施策に対する意識などの教職意識を比較し、小学校教員を目指す学生と比較することによって、保育者を目指す学生独自の特性を明らかにし、保育者養成や保育研修内容を改善するための手掛かりを得ることを目的としている。

調査の方法

- ① 調査の対象～保育者を志望する学生は、福岡県内の大学1校、短期大学3校の保育者養成系の学生241名（男子8名、女子233名、4大生16名、短大生225名）、小学校教員を志望する学生は福岡県内の大学1校の初等教育教員養成課程の学生207名（男子87名、女子120名）。いずれも4年制大学の学生は3年生および4年生、短期大学の学生は2年生を対象とした。
- ② 調査期間～平成27年9月～10月
- ③ 調査の方法～授業時間を利用して配布、回収した。
- ④ 調査の内容～就職後の勤続予定期間、保育者の社会的地位、高校までの好きな教科、苦手な教科、大学・短大で学ぶ教科の中で保育者となるために大切だと思う教科、好きな教科、苦手な教科、子どもにとくに育てたいと思うもの、子どもの問題行動に対する意識、新しい教育施策に対する意識、保育者・教師になるために日ごろ心がけていること。
- ⑤ 集計の方法～保育者を志望する学生と小学校教員を志望する学生を別々に集計する。4年制大学と短期大学、男子学生と女子学生は人数の偏りが大きいため別々の集計は行わない。
- ⑥ 倫理的配慮
 - ・アンケート用紙の冒頭に調査の目的を明記する。
 - ・無記名とする。
 - ・次の事項を明記する
調査内容は個別に公表されることはなく、平均値として集計、公表する。
学校別の集計、公表は行わない。
記入された調査用紙は、研究関係者以外の目に触れることのないよう、厳重に管理する。
集計後は速やかにシュレッダー処理する。
以上の事柄に同意するものだけが調査用紙を提出する。

結果と考察

保育者養成系学科の学生と小学校教員養成系学科の集計結果を比較対象として表示している。保育者養成系学科の学生は、短期大学の学生および女子学生が多数を占める一方、小学校教員養成系学科の学生は全員が4年制大学の学生であり、女子学生が約6割である。集計結果には、4年生大学と短期大学の学生の意識の違いや男女差が影響しているものと思われる。しかしながら、保育者を目指す学生及び就職者は現実に女性と短大卒業者が圧倒的に多く、小学校教員を目指す学生及び小学校就職者は4年制大学の学生が多く、男女の比率はほぼ4対6であることから、今回の調査対象者は現実の数字に近いものである。

表1は、保育者養成系の学科と小学校教員養成系の学科に所属する学生それぞれが希望する就職先を示したものである。

保育系学科では、約9割の学生が幼稚園または保育所への就職を希望している。その他としては、児童福祉施設、公務員、一般職などがある。幼稚園か保育所のどちらかを決めている学生のうち6割近くが保育所を希望している。最近では、幼稚園よりも保育所を希望する学生が増えてきている。その主な理由として次の4つがある。①幼稚園は勤務時間が不規則で長時間である。②一人でクラスを担当しなければならない。③幼稚園は教育の場であり、教育をする自信がない。④赤ちゃんを保育したい。

これに対して小学校系学科では、小学校教員を志望する学生は約7割にとどまっており、「その他」の中には「迷っている」という回答が少なくない。これは、調査の時点で本年度の教員採用試験の結果が判明しており、不合格だった4年生の迷いを反映しているものと思われる。

表1. 希望する就職先

保育系学科	幼稚園	26.2
	保育所	36.9
	幼稚園または保育所	26.6
	その他	10.1
小学校系学科	小学校教員	70.5
	その他	29.5

表2は、希望する就職先を決めた時期を示したものである。「小学校のころ」から「短大・大学入学後」では、保育系と小学校系との間にそれほど大きな差はないが、「小学校入学前」という回答は保育系学生が多くなっている。幼児や小学生の女児は「ケーキ屋さん」、「芸人」「看護師」などと並んで保育者が人

気の職業である（ベネッセ教育総合研究所、2009）。保育者志望の学生の中には、小さいころの思いをそのまま持ち続けたものがかかり多いことが分かる。

表2. 就職先を決めた時期

	保育系	小学校
小学校入学より前	23.1	0.9
小学校のころ	23.9	26.1
中学校のころ	23.5	17.4
高校のころ	20.1	28.0
短大・大学入学後	9.4	14.5

就職後、どれぐらいの期間勤めようと思っているかについては、保育系と小学校系との間に大きな違いがある。表3からわかるように、小学校系の学生の75%近くが「定年まで」すなわち一生の仕事にしたいと考えているのに対して、保育系の学生の5割以上が「結婚するまで」あるいは「子どもが生まれるまで」

と回答している。実際に、保育現場では、多くの保育者が10年以内に退職する。結婚して転居すると転勤ができない、とくに幼稚園では、勤務時間の関係で、子どもが生まれると勤めにくいなどの事情はあるにせよ、せめて学生時代には、「保育を一生の仕事にしたい」という気概を持ってほしい。

表3. 就職後の勤続予定期間

	保育系	小学校
1年から3年	9.0	0
4年から5年	7.3	0
結婚するまで	29.6	0
子どもが生まれるまで	23.2	3.3
定年退職まで	5.9	74.3
わからない	25.0	15.1

保育者および小学校教員の給与についてはどのように考えているのだろうか。小学校教員については、保育系と小学校系の学生はともに「普通だと思う」が最も多いが、とくに、小学校系の学生は、「少し高い」から「かなり安い」までまちまちなとらえ方をしている。一方、保育者の給与については、両者ともに「安い」と考えている。とくに、保育系

の学生の95.5%が、「少し安い」あるいは「とても安い」と考えており、「とても安い」と考えるものの割合は5割を超える。このことは、保育職の最大の問題点である。このままでは、能力のある学生の保育職離れが加速する可能性が高い。

表4. 小学校教員の給与

	保育系	小学校
とても高いと思う	0.8	0
少し高いと思う	0.4	0
普通だと思う	1.7	31.4
少し安いと思う	42.8	43.7
とても安いと思う	54.7	24.6

表5. 保育者の給与

	保育系	小学校
とても高いと思う	0.8	0
少し高いと思う	0.4	0
普通だと思う	1.7	31.4
少し安いと思う	42.8	43.7
とても安いと思う	54.7	24.6

小学校教員及び保育者は、社会の中で尊敬されていると思うかどうか尋ねてみた。表6お

よび表7に示した結果から、保育系の学生は「少し尊敬されている」が最も多く、小学校の

表6. 小学校の教員は尊敬されているか

	保育系	小学校
かなり尊敬されている	17.1	1.7
少し尊敬されている	63.8	53.9
あまり尊敬されていない	17.9	42.2
まったく尊敬されていない	1.2	2.2

教員がある程度尊敬される存在であると考えられているのに対して、小学校系の学生では「少し尊敬されている」と「あまり尊敬されていない」に評価が二分される。一方、保育者については、保育系、小学校系ともに、「少し尊敬されている」と「あまり尊敬されていない」の二通りに分かれる。

表7. 保育者は尊敬されているか

	保育系	小学校
かなり尊敬されている	4.3	1.1
少し尊敬されている	45.0	53.3
あまり尊敬されていない	46.8	42.2
まったく尊敬されていない	3.9	3.3

高校までに学んだ教科の中で、好きな教科得意な教科と嫌いな教科についてみてみよう。保育系の学生では、体育と音楽の2教科の比率が高く、いずれも50%を超えている。最も好きな科目も体育が第1位である。家庭科の割合も比較的高い。これに対して、理科、

社会、数学が低く、美術もあまり好かれていない。一方、嫌いな教科は、数学が最も多く、英語、理科、社会も3割を超えている。

表8-1. 高校までの好きな教科、得意な教科、嫌いな教科(保育系)

好きおよび嫌いはいは3項目選択 最も好きおよび最も嫌いはいは1項目選択

教科	好き	最も好き	得意	嫌い	最も嫌い
国語	34.5	10.0	17.5	18.3	5.0
数学	20.8	2.9	10.0	46.3	25.4
社会	17.5	4.2	5.9	32.9	19.2
理科	10.8	1.7	2.1	37.9	7.1
英語	26.3	4.2	12.6	39.2	12.1
音楽	58.3	15.8	14.2	3.7	0.8
体育	60.8	23.8	17.9	14.2	9.6
美術	23.3	5.4	12.9	10.0	1.6
家庭科	42.5	0.4	2.5	2.1	0
その他	0.8	0	0	0.8	0.8
特にない	3.3	—	—	0.8	0.8

小学校系の学生では、好きな教科として国語が最も多く、体育と音楽も4割を超えるが、理科、数学、社会、英語も3割以上であり、幅広く好かれていることが分かる。嫌いな教科の第1位は数学で、半数近くが嫌いであり、以下英語、理科、社会と続く。嫌いな教科では、保育系と小学校系で比較的類似した傾向がみられる。

最近の学生の傾向の一つである「理科離れ」とともに、「社会離れ」も進んでいるのではないだろうか。

表8-2. 高校までの好きな教科、得意な教科、嫌いな教科（小学校）

好きおよび嫌いは3項目選択 最も好きおよび最も嫌いは1項目選択

教科	好き	最も好き	得意	嫌い	最も嫌い
国語	47.8	11.6	23.7	23.2	7.2
数学	35.2	10.1	20.8	48.3	22.7
社会	31.9	10.6	13.0	28.0	3.9
理科	35.3	10.6	7.8	30.9	9.7
英語	30.0	7.7	15.9	31.4	10.1
音楽	40.1	5.8	4.4	14.0	1.0
体育	41.1	9.7	6.8	15.9	5.8
美術	24.2	1.0	2.4	4.8	1.9
家庭科	1.9	0	1.4	1.4	0.5
その他	1.9	0	0	0	0
特になし	1.4	—	1.4	2.9	2.9

大学、短大での好きな教科と嫌い・苦手な教科を見ると、「体を動かす科目」、「美術、造形に関する科目」、音楽に関する科目の人気が高い点は共通している。とくに保育系では、この3科目に人気集中している。小学校系では、「心理学に関する科目」の人気が高く、全体の中でも最も比率が高い。「教育実習」を「好き」と回答する学生は、保育系の学生の3倍に近い。嫌いな科目を見ると、保育系、小学校系ともに「教育・保育の原理に関する科目」が最も多く、とくに保育系では半数近くが「嫌い」と回答している。「理科学的な科目」も、保育系、小学校系ともに嫌いとする学生が比較的多い。保育系では、音楽が好きな学生が多い半面で、嫌いな学生も少なくない。保育系の学生にとって、ピアノが弾けることは必須条件であり、ピアノがある程度弾ける学生は音楽が好きだが、そうでない学生にとってはつらい科目になっているものと考えられる。

必要だと思う科目を見ると、保育系の学生の「音楽に関する科目」が8割を超え、圧倒的

に多い。採用試験ではピアノが必ず課され、多くの養成校で最も力を入れている科目であることを反映している。それ以外のほとんどの科目についても、必要と考える学生の割合が5割を超えている。そのなかで、「教育・保育の原理に関する科目」と「理科的な科目」の割合が低い。

「教育・保育の原理に関する科目」は、保育の本質を理解し創造していくために不可欠の科目であり、保育者にとって最も重要な科目である。また、「理科的な科目」は、幼児の好奇心の主要な対象であり、知的発達や自然に対する優しさ、思いやりを育てる上で重要な科目である。保育者養成校では、このことを踏まえて、この2つの科目を中心に、「指導方法に関する科目」、「教育、保育の計画作成に関する科目」、「教育、保育の計画作成に関する科目」、「相談・援助に関する科目」などの教職系科目が、興味が持てる、わかる授業となるような工夫が求められる。

表9. 大学、短大での好きな教科、嫌い・苦手な教科（自由選択）

	保育系		小学校	
	好き	嫌い・苦手	好き	嫌い・苦手
教育・保育の原理に関する科目	6.9	47.1	21.3	29.0
心理学に関する科目	22.5	14.9	59.9	8.2
指導方法に関する科目	9.4	7.7	33.3	6.8
教育、保育の計画作成に関する科目	2.5	12.3	8.7	17.8
福祉系の科目	14.4	18.3	5.3	15.5
音楽に関する科目	41.6	27.4	30.0	14.0
美術、造形に関する科目	42.1	17.3	51.7	7.7
体を動かす科目	59.9	5.3	38.6	16.9
相談・援助に関する科目	7.9	7.2	22.7	0.9
理科的な科目	7.4	30.5	15.0	22.7
特別支援に関する科目	15.3	6.7	22.7	7.7
健康・栄養に関する科目	25.2	3.8	2.4	3.9
教育実習、保育実習	12.4	7.7	34.3	6.8
とくにない	4.0	4.3	2.9	23.7

幼稚園教育要領や保育所保育指針、小学校学習指導要領には、数多くの教育目標や内容が示されている。これらの目標や内容の中で、保育系の学生はどのような目標が大切だと思っているのだろうか。

表11からわかるように、「やさしさ・思いやり」が最も多く、この項目だけが5割を超えて

表10. 大学、短大での必要だと思う教科、あまり必要ないと思う教科（自由選択）

	保育系		小学校	
	必要	必要ない	必要	必要ない
教育・保育の原理に関する科目	35.6	11.1	61.4	20.1
心理学に関する科目	58.2	6.5	74.9	1.4
指導方法に関する科目	56.0	1.8	64.3	0.4
教育、保育の計画作成に関する科目	48.3	2.4	57.0	1.8
福祉系の科目	46.7	1.8	46.8	19.8
音楽に関する科目	83.1	2.4	31.4	23.7
美術、造形に関する科目	49.5	1.8	34.2	16.4
体を動かす科目	51.1	2.9	40.6	10.1
相談・援助に関する科目	54.3	3.5	64.3	4.3
理科的な科目	24.5	25.2	31.4	9.6
特別支援に関する科目	49.5	0.6	62.3	1.4
保健に関する科目	53.3	2.9	53.1	1.9
教育実習、保育実習	61.4	1.8	75.4	0

表11. 子どもに育てたいと思うこと（3項目選択）

	保育系	小学校
健康な体	28.3	30.0
豊かな感性	38.3	49.3
幅広い知識・教養	2.0	20.8
自主性・自律心	22.1	40.6
やさしさ・思いやり	59.2	44.0
心の強さ	8.8	13.5
人や状況に対する気配り	11.3	11.1
まわりのものに対する興味、好奇心	13.3	16.4
道徳心	18.8	19.3
ことばや国語力、コミュニケーション力	10.8	44.0
科学心、科学的な思考力	0	2.4
英語力	0	3.4
算数・数学	0	6.9
表現力（美術、造形、音楽、身体表現）	5.0	1.4

学生と共通している。その一方で、小学校系の学生は、「ことばや国語力、コミュニケーション力」と回答する学生が「やさしさ・思いやり」と並んで最も多く、科学心、科学的な思考力、英語力、算数・数学を挙げる学生も少数ながらいることから、保育系学生と比べて、能力的な側面に目を向ける傾向があるといえることができる。

「保育者や教員にとって必要なこと」では、「子どもの気持ちがわかる」、「責任感がある」、「同僚や保護者と、よい関係が持てる」などの項目は、保育系と小学校系の学生に共通して必要だと感じられている。さらに、小学校系の学生は、「子どもが興味を持ち、わかる教え方ができる」、「深い専門的な知識を持っている」、「深い専門的な知識を持っている」など、知識や教育方法にも必要性を感じる学生が多いが、保育系学生は少数である。

表12. 保育者や教員にとって必要なこと（3項目選択）

	保育系	小学校
やさしい	14.1	8.7
明るい	27.0	19.3
親しみが持てる	15.8	21.3
責任感がある	36.1	46.9
幅広い知識を持っている	12.4	29.0
深い専門的な知識を持っている	5.8	30.4
子どもが興味を持ち、わかる教え方ができる	11.6	49.3
子どもの気持ちがわかる	36.1	54.1
同僚や保護者と、よい関係が持てる	29.4	31.4
道徳心があり、ルール、マナーをしっかりと守る	27.0	17.9

保育や授業におけるパソコンの活用では、小学校系の学生の3分の1は積極的に活用するべきだと考え、「あまり活用しないほうがよい」という回答は0であるのに対し、保育系の学生は、全体的に見るとパソコン活用に消極的であることがわかる。保育系の学生や保育者の多くは、「保育は子どもと心を通わせながら行うものであり、パソコンや教育機器を使うと心が通わない」という考え方があり、そうした思いが反映されていると考えることができる。

表13. 保育・授業におけるパソコンの活用

	保育系	小学校
積極的に活用するべきだ	8.8	33.8
ある程度活用するべきだ	71.8	64.7
あまり活用しないほうがよい	19.9	0

わが国では、2018年度から、小学校3年生から英語活動が必修化、小学校5・6年生はは教科に移行する。この状況をどのように受け止めているか尋ねてみた。小学校系では、約2割の学生が、「英語

よりも、国語（日本語）教育に力を入れるべきだ」と否定的にとらえているものの、7割近い学生は肯定的である。一方、保育系の学生は、「国際化社会に向けて大切なことだと思う」回答率が、小学校系に比べてかなり低くなっている。

現在、1種免許状を取得する期間を6年にすることが検討されている。これについては、保育系、小学校系とも「わからない」という回答が多いが、「必要だと思う」という回答は小学校系に多く、保育系にはほとんどいない。

いわゆる小1プロブレムの原因については、子どもを取り巻く社会全体の変化と考える学生が多いが、家庭のしつけや教育力の低下が原因と考える学生は小学校系で多く見られる。

表14. 英語を教科にし、英語教育を重視すること

	保育系	小学校
国際化社会に向けて大切なことだと思う	39.0	67.6
今までどおりでよいと思う	40.0	8.7
英語よりも、国語（日本語）教育に力を入れるべきだ	21.0	20.3

表15. 教員免許の取得のための在学年数を延ばすこと

	保育系	小学校
必要だと思う	4.6	29.5
必要ないと思う	36.2	29.0
わからない	59.2	34.3

表16. 小1プロブレムの原因

	保育系	小学校
家庭のしつけや教育力の低下	18.0	35.3
幼稚園や保育所の教育力の低下、保育者の指導力不足	12.7	9.2
小学校の教育力の低下、教員の指導力不足	6.8	5.8
子どもを取り巻く社会全体の变化	63.0	49.8

特別支援児を担当することについては、「できれば担任したくない」という消極的な姿勢の学生も少なくないが、担任することに積極的な学生は小学校系で多くなっている。

保育者、教員になるにあたって心配なことでは、「しっかりと子どもの指導・援助ができるか」、「先輩や同僚とうまくやっていけるか」、「知識、技術の不足」を挙げる学生が、保育系、小学校系に共通して多い。「先輩や同僚とうまくやっていけるか」を心配する学生が保育系に多いのが特徴的である。

社会や教育の話題に関する関心では、保育系、小学校系ともに、多くの学生が新聞を読んでいることがわかる。社会の出来事に関する情報源はインターネットかテレビ、ラジオである。

新聞も読まずネットやテレビでニュースを見ることもない学生もそれぞれ1割近くいる。

表17. 特別支援児を担当すること

	保育系	小学校
積極的に担任したい	9.8	31.9
少しは担任したいと思う	60.1	42.5
できれば担任したくない	30.1	25.6

表18. 保育者、教員になるにあたって心配なこと (自由選択)

	保育系	小学校
しっかりと子どもの指導・援助ができるか	58.5	78.3
子どもたちにしたわれ、尊敬されるか	27.0	35.7
先輩や同僚とうまくやっていけるか	47.7	27.5
保護者にきちんと対応できるか	59.8	72.9
身体的な弱さ	7.1	13.2
精神的な弱さ	20.3	30.0
知識、技術の不足	54.7	62.8

表19. 社会や教育の話題に関する関心

	保育系			小学校		
	よく	時々	ほとんどない	よく	時々	ほとんどない
新聞を読む	1.1	16.6	82.3	3.4	31.9	64.2
テレビ、ラジオのニュースを聞く	49.7	39.2	11.1	44.0	42.0	14.0
インターネットでニュースを見る	40.4	50.3	9.3	52.7	34.8	11.1
教育・保育関係の雑誌を読む	1.7	32.0	66.3	3.4	23.2	72.0
友達と、教育や保育の話題で語り合う	27.6	55.2	27.4	16.4	50.2	27.1

以上の結果から、保育者を目指す保育系学科の学生は、次のような教職意識を持っていることが分かる。

- ・就職後、比較的短い期間での退職を考えている。
- ・保育者の給与はかなり低いと思っている。
- ・保育者の社会的な地位（尊敬される程度）はあまり高くないと感じている。
- ・国語を除く主要教科（数学、社会、理科、英語）は、嫌いまたは得意でない学生が多い。
- ・音楽、身体表現、造形などの実技系科目は好きだが、教育学などの教職科目が嫌い・苦手としている。
- ・育てたいこととして、やさしさ、思いやり、感性などの心情的な面への関心が高く、知的な面への関心は低い。
- ・幅広い知識、専門的知識を持つこと、わかる教え方などの必要感が乏しい。
- ・保育でパソコンを活用することには消極的である。
- ・新聞は殆ど読まないが、保育雑誌は比較的良好に見ている。

これらの特性を踏まえたうえで、保育者養成校や保育現場では、学生と保育者の質の向上を図るための具体的な取り組みを行う必要がある。

まず第一に、保育を一生の仕事と考える意識を高めていく必要がある。現実的に保育現場には長期間勤めにくい事情があるにせよ、数年間で勤め終るという意識と、一生の仕事という意識とでは、学生時代の学びの姿勢や保育者になってからの向上心に大きな違いが生じてくる。養成校においては、一生取り組むに値する仕事であるという意識改革を図るとともに、短期間で退職せざるを得ない、勤務時間、育児休暇などの現状の解決に向けて保育現場とともに改善していかなければならない。

教育、保育に関する科目、指導法に関する科目、教育課程・指導方法に関する科目など、保育理論系の科目の改善も大きな課題となる。受講学生の少人数化を図るとともに、学生が興味を持てる授業、わかる授業となるような、工夫が求められる。これらの教科を担当する教員が、養成校の枠を超えて、連携、協力した取り組みが期待される。

引用文献

保育所保育指針解説書 2008 厚生労働省

室みどり、森崎陽子 1998 保育学生の意識調査—20年前との比較— 和歌山信愛女子短期大学 信愛紀要 38, 9-19.

山口孝道 1986 保育科学性の保育意識 宮崎女子短期大学紀要 12, 55-60.

全国保母養成協議会 1981 保育学生の意識調査 保母養成資料第18号 日本保育協会

ベネッセ教育総合研究所 2009 第2回子ども生活実態基本調査 速報版

日本保育士協会 2014 保育士不足が保育現場に与える影響についての調査報告

The Consciousness of the Teaching Profession of the Students Aiming to the Kindergarten's Teacher. — Comparison with the Students Aiming to Elementary School Teacher —

Toshiaki TANAKA*¹, Ryota FUTAGOISHI*², Mikako NAGAFUCHI*³

*¹Kyushu Women's Junior College, Department of Childhood Care and Education

*²Kindergarten of Fukuoka University of Education

*³Nakamura Gakuen University, Department of Childhood Care and Education

Abstract

To inspect the feature of students aiming to kindergarten teacher, we made a survey of the consciousness of the teaching profession and compared this result with students aiming to elementary school teacher. As a result some features of students aiming to kindergarten teacher were found.

Their main feature is as follows.

- They think that they will retire early.
- They think that kindergarten teacher's salary is very cheap.
- They think that kindergarten teacher's social status is not so high.
- In some subjects that learned in junior high school and high school they dislike main subject such as mathematics, social studies, science and English.
- Some subjects that learned in college the like subject of exercise such as music, the formative arts, body expression, but dislike some subjects of teaching profession such as pedagogy.
- They showed a negative attitude toward to use a personal computer in education.
- They don't read a newspaper at all.